

## 『醒睡笑』巻之一「ふはとのる」に見られる

### 安楽庵策伝の編集意識と創作意識

——「笑い」と人物関係を通じて——

西 浦 和 稔

#### 1 分類と創作における「笑い」の問題

仮名草子とも、笑話本とされる元和九年成立の『醒睡笑』の全話は安楽庵策伝によって四十二の項目に分類されている。何らかの要素によって系統立てて分類されていることは関山和夫氏の指摘の通り『醒睡笑』と同時期の類似作品である『戯言養気集』、『きのふはけふの物語』にはみられず、『醒睡笑』の特徴となっている<sup>(1)</sup>。だが策伝の分類方法に疑問があることは既に先行研究において指摘されている<sup>(2)</sup>。やはり策伝自身の分類基準が明確にされていないことが原因であろう。なぜ四十二という項目数なのか、それぞれの項目をどのような意図で分類したのか、項目名をどのような考えに基づいて設定したのかは明らかではない。

策伝は序において「策伝某小僧の時より、耳にふれておもしろくおかしかりつる事を、反故の端にとめ置たり。」<sup>(3)</sup>

『醒睡笑』巻之一「ふはとのる」に見られる安楽庵策伝の編集意識と創作意識

と『醒睡笑』全体を構成するものとして「笑い」を根底に据えていることを記している。では作品の性格として重要視されていた「笑い」は『醒睡笑』の話の分類においてはどれほどの役割を果たしていたのであろうか。また序のこの箇所は、「笑い」は話の分類だけではなく、採取にも深く関わっている。

だが、話の採取における「笑い」には問題がある。序から話の採取方法が他人から聞いたものであることがわかる。策伝の序をそのまま受け入れるならば、「策伝が聞いたおもしろい話を集めた」とこととなるが、この序をそのまま受け入れてよいものであろうか。『醒睡笑』所収の全話が聞いたまま記されていると言えるだろうか。全てを考察して述べるわけではないが、言えないと断定できよう。例として卷之五「上戸」の一話目は漢文調で書かれている。

耳で聞いた話をなぜ漢文調で書くのか。明らかに不自然であり、何らかの典拠があることを窺わせる。この他にも『醒睡笑』の話には聞いたものだけではなく、既存の文字情報に典拠を求めている箇所があると考えられる。

このように「笑い」と話の採取経緯を考えると「笑い」が優先されているように思われる。つまり「面白くおかしかりつるはなし」を集めているので全ての話に「笑い」が存在することになるはずである。にも関わらず、「笑い」が確認できない話も存在する。

採取経緯を「笑い」について考えられるのが策伝による創作、改変である。策伝が話を改変する理由としてやはり「笑い」が挙げられる。「笑い」と遠い、または関係のない話を改変することで、笑話としての性格を強化、付与しているのではないか。一方、創作の理由は策伝自身の笑話の作者としての主張と考えられる。策伝が自身で作出した話を『醒睡笑』に含めた可能性はある。このように策伝が改変、創作したことは十分に考えられる。

策伝自身が項目ごとにある程度の分類基準を設けており、話に手を加えていたのならば、分類項目から外れる話は存在しないこととなろう。だが、『醒睡笑』には分類項目からはみ出す話があることは岡雅彦氏の指摘によって明ら

かである。岡氏は、「笑話を笑話の方法なり素材なり、場面なりの一つの統一した基準で四二に分類することは出来ないことであり、策伝自身そのつもりはないのである。」<sup>(4)</sup>と指摘している。またこの策伝はかなりの収集癖があったようであり、同じ策伝の手になる『百椿集』<sup>(5)</sup>は、自分がコレクションした椿を挿絵入りでまとめたものである。また、『策伝和尚送答控』<sup>(6)</sup>に見られるように、贈り物に狂歌を添えて当時の文化人、有名人に贈ることで返歌や書簡を貰い、それを集めていたが整理はされていない。これらのことから収集物に対して策伝が分類にまで関心があったかは疑わしい。

だが、『醒睡笑』を雑多な状態で放置していないことは分類の必要性を感じたためであろうし、分類するからには何らかの基準を持っていたはずである。その項目における基準を考察して、策伝の意図を明らかにしていく事を目的とする。その考察過程においても「笑い」が重要になってくると考える。そして「笑い」を作り出すものは様々あるが、人間が生み出す部分が大きく、作中の人物関係は「笑い」を探る手段と成り得よう。ここまでで、いくつかの問題点と推論を示したが、本稿では、巻之一の一項目「ふはとのる」を対象として具体的に考察を進めていく。

## 2 「ふはとのる」の構成

巻之一「ふはとのる」はその項目名の元に全十話が収められている。この項目名が何らかの分類基準となっていることは疑いない。しかし、「ふはとのる」という項目名は他の項目名と比較しても抽象的な項目名である。策伝の真意を探るには全話を考察した上で改めて考える必要があるため項目名についての考察は後に回すこととする。

「ふはとのる」全十話はどのような「笑い」や人物によって構成されているのであろうか。一話ずつ確認することとする。

【一話】

忿怒の前にハ、不動剣をひつさけて、降魔の儀をしめす事あり。されはにや、昔五山の僧に、幸藏主とて兵法の道に達せし人あり。都にのほる達者、ミナ一打二打うたぬはなかりしに、或時奥山流の兵法者上洛しけり。例のことくしあひの日さだまりぬ。京中知もしらぬも、ことく物見に出るに、幸藏主は鎧、兵法者は太刀にてむかふ。鎧をさつとふりまハすを見て、其俣太刀をなげすて問訊しけり。こハ何事そやとへハ、幸の鎧先より火焰出たり、活身の摩利支天なり、たつとさに太刀をすつといひけれハ、幸大に悦喜し、ミつからず、めて、彼兵法者に弟子ともあまたひきつけたり。のせすまいた上手。

仏教にゆかりのある話である。兵法者（傍線部②）の言葉（傍線部③）に浮かれた幸藏主（傍線部①）の行為（傍線部④）に導かれる「笑い」（傍線部⑤）を笑うのが妥当と考えられる。人物関係については、達人の幸藏主のほうが上位に位置づけられよう。身分の高い者を笑うことで「笑い」は強調されること<sup>(6)</sup>からも、身分差を明らかにしておく。最後に細字で評が添えられているが、これは宮尾與男氏が指摘するように策伝の註記の言葉といえよう<sup>(7)</sup>。

この一話に見られる「笑い」は一人では成立しないことが特徴的であり、二種類の登場人物によって構成されている。その二種類の人物を「笑い」を実際に生み出す「主構成（傍線部①）」と、「笑い」に至る経緯を明確にする存在を「副構成（傍線部②）」と呼ぶこととする。そして、主構成を変化させる副構成の行動を傍線部③、傍線部③の後の主構成の行動を傍線部④、主構成が生む「笑い」を傍線部⑤として残りの話を同様に考察していく。各話において傍線部は同様の定義づけで使用することをここに断っておく。

無論、その他の登場人物も存在するが、本稿では「笑い」を一つの要素として考えるため、その他の登場人物に関しては触れないこととする。

一話の構成を要素順に示すと以下のようになる。

①主構成の登場……（幸蔵主）



②副構成の登場……（奥山流の兵法者）



③副構成の行動……（活身の摩利支天という）



④主構成の行動……（幸大に悦喜し）



⑤発生した「笑い」……（弟子ともあまたひきつけたり）

【二話】

①仁物らしき男、杓の前後にたいを入になひ、たいはたいハとうりけるを、<sup>②</sup>ある家のぬしよびいれて、けしからすさむき日也、まづちと火にもあたり、ちやをものミておとをりあれ、ちらと一目見しより、<sup>③</sup>これはたゞならず、いにしへハさもありし御身なりしが、おもはずもよにおちぶれて、かゝるわさをもし給ふにやと、涙をこぼし候ぬといひければ、しづかに火にあたり、茶などのミて、<sup>④</sup>たちさまに太なるたいを一つ、亭かまへにさし出したり。こはなにとしたる事としんしやくしけれバ、<sup>⑤</sup>いや、けふは心ざせんその頼朝の日なり。

一話と異なり日常生活での話である。話の素材は異なるが構成は一話と同型である。「笑い」は「商品を無償で譲る」という非常識な行為によって導かれ、傍線部⑤のような明らかに虚構と考えられる言動に集約される。傍線部①

の身分と傍線部⑤の「頼朝」との身分差が「笑い」を一層引き立てている。

【三話】

①始は鍛冶にてありつる者、傍に鞠をすいてけたり。てんねんと器用ありけれハ、人ミ<sup>①</sup>なほめそやすにより、家職をすて、飛鳥井殿に出入し、葛袴と沓をゆるされ、田舎へ下らむともよほす時、<sup>②</sup>知音の者異見し、<sup>③</sup>そちは生れつきいつくしく、自然と殿上人の形あり、とてももの事に其風を似せよといふに、同心し、五鉢つけの跡をひた物しけり。すでに位らしき様になりすましたるとおもひ、あるところに行たれば、人々かのあたまの逸興を見つけ、不審しあへり。刀の中心にてやきたるゆへに、<sup>⑤</sup>備前長舟祐定作といふあり。さすが俄になをさむよしもなけれハ、又もとの鍛冶になりぬる事よ。

三話では傍線部①に対する二段階の他者の影響が確認される。一度目は二重傍線部①のように周囲の人に影響される。だが、この影響は直接は「笑い」には結びつかない。本文にこの下りがなくとも、「笑い」は成立すると考えられるため絶対条件ではないといえる。二度目に傍線部②によって影響を受けた結果として、傍線部④の行為が導かれ、「笑い」が発生する。本筋の構成は一話、二話と同型であるが、三話には二重傍線部①の行為と、後日譚にも似た結末がある。この後日譚によって、教訓的性格が間接的に確認されるといえよう。

【四話】

①ト都檢校叡山にて大衆集会の砌、平家ありし。山法師をりのべ衣うすくして、恥をハえこそかくさ<sup>②</sup>りけれとあるを、いかに心の涼しかるらんとなをしてかたりけり。其時大衆あつと感し、平家過て同音にほめつるを、大に慢し、<sup>④</sup>山を下りたるか、思ひの外俄に日の暮ぬるまゝ、灯のあるをたより、宿をかりぬ。<sup>①</sup>亭出てあいさつし、<sup>⑤</sup>即一句所望せし。<sup>③</sup>あなどりて、あそここ、おとしかたりける時に亭主、

うくひすの声はかりして一の谷

平家ハおちてきかれさりけり

此哥を吟するまに、もとのことく天地あきらけし。是ハ此檢校自慢の心より、天狗の所為也とぞ。

これまでの話とは少し様相が異なる。構成としては傍線部①、②、③が存在し、その箇所を背景として点線部④、⑤から点線部⑥、傍線部⑦へと導かれる。構造が見えにくいので要素順に改めて表示する。

①主構成の登場……（卜都檢校）

②副構成の登場……（大衆）

③副構成の行動……（同音にほめつる）

④主構成の行動……（大に慢し）

⑤副構成の登場……（亭）

⑥副構成の行動……（即一句所望せし）

⑦主構成の行動……（あなどりて、あそここ、おとしかたりける）



⑤発生した「笑い」……（もとのことく天地あきらけし）

同じ二段階の三話と異なり、前半の一連の流れは話の構成上必須である。具体的に「笑い」に集約していくのは後半の「亭」とのやり取りである。共通の①を中心にして話が構成されている。二層的構造を持つことが特徴である。

他に目を引くのが狂歌の利用であるが、狂歌の利用は皮肉、批判の現われであろう。その批判を受けて二重傍線部②にみられる慢心を戒める教訓が主張されている。ここに登場する天狗は天狗と考えられ、神仏と同じ系統に属することとなるであろう。「笑い」については⑤の行為が明快な「笑い」を発生させているといえるのだろうか。慢心ゆえの手抜きにより、天罰を受けている。ここに「笑い」を見出せないことはないが不明確でかなりの作爲的な読みが求められるのではないか。

やはり、四話に関しては天罰めいた教訓が前面に押し出されている感是否めない。

### 【五話】

足利にての事なるに、塩ハく<sup>①</sup>とよんで、いかにもいづくくわかし商人来れり。こぞかしき学侶一人出合いひけるハ、た、さへも道を二里三里とは、たやすく歩行なりさうもなき、ゆうにそだちのすかたなるが、此をもき物をもちては、なにとしえ<sup>③</sup>ありかれ候や、なとかたり、時刻うつり、やうくかへらんとする時、<sup>④</sup>辨にしはをはかり、僧にあたへぬ。こはなんの故そとふ。しんハなきよりといへり、われならて誰とハん、次信か日なり、こゝろざしに参らする。<sup>⑤</sup>

二話と全くの同型である。傍線部④に関しても売り物を無償で与え、傍線部⑤も忠臣「佐藤継信」との身分差はい



うまでもない。ただ、②が最初から悪意を持つて接しているところは愚か話に属する可能性を持っている。

#### 【六話】

① 倅<sup>①</sup>の妻あり。ふしきに夫にはなれぬ。日比かれがたのミし寺によせて、追善のいとなみをなせとも、しかく<sup>②</sup>の事もなかりし。七日にあたるけふ、いはいのまへに参り、愁涙袖をしほりけるに、住持出あひていはる、やう、めいとハきりもなくハレかましや、あらゆる大名小名のつきあひにて候に、二字をうけたる人の、はさミ箱を一つもたせぬほとなれば、<sup>③</sup>みすばらしく候と、たしかに経文に見えてありと、しめしけれハ、<sup>④</sup>いたハしや、なりかわるからふずとて、<sup>⑤</sup>唯一つあるはさみはこそそほとこしける。

話の構成は一話などと同じ五つの要素で構成されている。六話の特徴は傍線部④である。これまでの話と異なり、傍線部①の心境が大きく、または慢心しているわけではない。傍線部②の言葉を真に受けている。そして「笑い」は二つの「笑い」が認められよう。一つは、住持に言われるがままに従う妻の愚かさ。明らかな嘘に騙されている。もう一つは、経文という言葉まで持ち出して施しを求める俗的欲望の強い住持への皮肉めいた「笑い」である。物を与えることに關しては二話、五話と同趣といえる。

#### 【七話】

壁に耳ありといふ事をわすれ<sup>②</sup>、<sup>①</sup>そんでうそれは中く人てハないといひ出しけるか、うしろをミれば其仁あたり。肝をけし<sup>③</sup>て、唯いきほどけちやといふ。そしらる、人、<sup>④</sup>はむるを聞てよろこひ、<sup>⑤</sup>そのま、阿弥陀の印を結ひたることよ。

話の構成として傍線部②が動詞「わすれ」に導かれるもので主語を直接示す言葉がない。また、傍線部①がけなさ

れる根拠が明らかにされていない。傍線部④と傍線部⑤については他の話と同型であり、神仏を対象として用いている。だが、具体的に書かれているのは傍線部③以降の出来事である。他の話と異なり、地域や経緯が示されていない。傍線部①に対する配慮か、元々誰かモデルがあつたため抽象化したのか。人物描写の点において疑問が残る。

### 【八話】

奉公人<sup>①</sup>のはてとおほしきか宿をかり、四方山の事をかたりつくしけり。亭<sup>②</sup>はめて、いかさまた、の人とは見え候ハす、もはや休給へ、夜着をまいらせんやといふ。いや、いかほどの野陣山陣をしつけ、せうくさむき事をハしらす、無用といふて、きのま、いねけるか、夜ふくるにしたかひ、ひた物さむし<sup>③</sup>。時に亭主<sup>④</sup>、是の鼠にハ足をあらハせたかとおふ。いや、さやうの事はなしとこたふ<sup>⑤</sup>。それならハむしろを一二枚きせられよ、鼠がきた物をふまハ、むさかろふすにと。

身ひとつハ山の奥にもありぬへし

すまぬこ、そをき所なき

話の構成は五つの要素が認められるが、傍線部⑤は他の話と異なる性格を持つている。傍線部④の結果が直接反映されているわけではない。直接反映しているのは二重傍線部③である。一話などはこの箇所<sup>③</sup>に相当する箇所を「笑い」としているのであるが、八話に関してはその次の箇所となる傍線部⑤で主たる「笑い」が作られている。つまり、「笑い」が二つ存在することとなる。話全体の中心となる「笑い」は傍線部⑤である。傍線部①の屁理屈にも等しい言い訳が傍線部⑤に見て取れる。「笑い」が傍線部②によって直接構成されず、傍線部④に気づいたものの今更言い出せないところを無理やりこじつけている。自業自得にも近い「笑い」であるといえよう。

また、狂歌が添えられているのは四話と同じであり、二つの「笑い」を確認することが出来るのは六話と同じであ

る。一つ目の「笑い」から二つ目の「笑い」への連続性があり、一つの「笑い」と認識することも可能であるが、「笑い」の質が異なると考えられるため、二つに分割して考える。

### 【九話】

十計なるむすめの容顔美麗なるに、女房達三人打そひておけるを人ミつけ、是はこなたの御息女候や、さて／＼いつくしさはかりなき花のかたちハ、名に聞し楊貴妃、李夫人もかくこそありつらめなとほめければ、<sup>①</sup>親父是を聞ゐて、さればよ、<sup>⑤</sup>此むすめハそのまゝ、母のかほちやと。

これまでに見た話とは全く異なる構成をしていることがわかる。構成を要素順に示すと以下ようになる。

②副構成の登場……（人）



③副構成の行動……（ほめければ）



①主構成の登場……（親父）



⑤発生した「笑い」……（此むすめハそのまゝ、母のかほちやと）

「ふはとのる」全十話の中でも、「笑い」と人物関係が読み解きにくいと考えられる。登場人物の並び順が異なり、①が後ろにあることは問題はないであろう。何よりの問題は④に当たる主構成が示されていないことである。④の主構成の行動が示されていないことは「笑い」の根拠が希薄になっているといわざるを得ない。

それだけではなく、⑤の「母」の理解によって内容も「笑い」も異なってくる。この「母」を娘の父の母（祖母）とするか、娘の母（男の妻）と捉えるかによって妻自慢か、男の母親自慢のどちらかが変わってくる。娘が母親や祖母に似ていたとしても、それは一向に「笑い」を生むものではない。「母」に当たる人物の容姿が悪いと仮定すれば皮肉めいた「笑い」は成立しうる。それとも、①の容姿があまりにも酷いのであれば「笑い」を生むこともある。だが、本文中にはそのような記述は見られない。この話の本文だけで「笑い」を具体的に理解することは難しい。その根拠も対象も明らかではない。「女房」「御息女」との言葉から、貴族社会の流れを組む話の可能性があり、悪い容姿とプライバシーに配慮しての抽象的な表現にとどまっていることも考えられる。プライバシーの意識については七話に通ずるものがある。

【十話】

② ある人連哥の席に句を出し、けしからず慢したる ④ 顔を見つ、脇からいき天神天神といふて膝をつきけれハ、あまりなつかれそ、⑤ 社壇がゆるくにと申され事ハ。

本稿では話の構成要素を五つに分けているため傍線部①と傍線部④は無理に分けた感は否めない。この話も一話などとは異なる構成をしている。構成を要素順に示すと以下のようになる。

② 副構成の登場……（ある人）

④ 主構成の行動……（慢したる）

←

①主構成の登場……（顔）



③副構成の行動……（いき天神天神といふて膝をつきけれハ）



⑤発生した「笑い」……（社壇がゆるくにと申され）

ここでは②と③の前に既に④が完成している。つまり、副構成が果たすべき役割は既に果たされていることとなる。それでも、③にあるような行動に出る。⑤は他の話と同様であり、神仏との現実的な距離感が「笑い」を増している。このようにして全十話の「笑い」と人物関係を見ると共通する事柄が浮かび上がってくる。①の主構成が②の副構成によって、③の意識に影響を受け、主構成の態度が④のように変化する。その結果として主構成が生み出す「笑い」⑤が導かれる。⑤で現実との距離をより鮮明にするために用いられる素材は大きく分けると、神仏に類するものと、歴史上の人物とに分かれる。

二つを比較すると

神仏（類するもの）

【一話】【四話】【六話】【七話】【十話】

歴史的人物

【二話】【三話】【五話】【八話】

十話の菅原道真の扱いは「天神」となっていることで神仏に区分することとする。二つの要素については配列に偏りがあるでもなく、数に差があるわけではない。例外となるのが九話である。これらは策伝が聞いた話とすれば当時の人々にとっての「立派なもの」像が浮かび上がる。神仏に類するものが登場するが、そこに策伝の宗教的背景による作意を認めることは問題があるう。確かに阿弥陀などは宗教的要素ではあるが、一般的な理解、認識を越える描写

がされているわけではない。

全十話を見た結果四話、七話、九話、十話以外は一話と同じ構成となっている。四話、七話に関しては②の副構成が前に来ている。だが、①の主構成の存在を②の次に示していること、②以前に①を推測させるような要素がないことから話の展開に問題はないと考えられる。十話に関しても七話同様に事前の理由付けがなされていないものの、話の構成としては「笑い」へと十分に繋がっていく。

最大の問題は九話である。この話のどこに「笑い」を求めるべきであろうか。他の話に見られるような④がみられないことは既に述べた通りである。「笑い」への根拠が全く示されていないのである。同じ抽象的な話の七話は「けなす」話であるためモチーフを抽象化していると考えられるが、九話では「十計なるむすめの容顔美麗なる」と素晴らしさを伝えている。モデルとなった人物がいたとしても、隠す必要はないのではないか。九話だけが異なることがわかる。

だが、その九話も他の話と同じ項目に分類されているのである。異なる話の構成をしていて、「笑い」へと結びつかない話であるにも関わらず同一項目に分類されていることは「笑い」以上に何らかの要素が項目分類に影響していることを示すのではなからうか。その要素については、次の章で見ていくこととする。

### 3 項目名「ふはとのる」と分類基準

全十話を見てきたが七話と九話に関しては、策伝の手が加わっている可能性が見えてきた。では、その全十話を総括している項目名「ふはとのる」とはどのような基準であろうか。『角川古語大辞典』において「ふはと」と「のる」の二つの項目として挙げられており、それぞれに複数の意味があるが「慎重な考えもなく軽々しくふるまう様子を表

す」「ふはと」と「相手に仕向けられて、そのようになること。乗り気になる。」(のる)という意味がもともと策伝の意図に近いように思われる<sup>(8)</sup>。一語では確認できない。また、『小学館日本国語大辞典・第二版』においても一語では確認できず「ふはと」は古語として「慎重に考えることなくうつかりと行動するさまを表す語。軽はずみに。」と記されている。「のる」は「思わずつりこまれる。一杯食う。ひっかかる。だまされる。のせられる」とある<sup>(9)</sup>。辞典類からおおよその推測は成り立つ。

特に考えられるのが③の副構成の行為と、それに伴う④主構成の行為という心情的変化があげられる。心情変化は個人に属する部分であり、必ずしも社会的変化を伴うわけではなく、主構成の中だけで変化が認められる。そして、主構成に心情的変化を起こすに際して、副構成は何らかの意図を持って意識的に行為に出る場合と、特別な意識をもたずに行為に出る場合があり、以下の通りでもある。

意識的に行為に出る 【一話】【五話】【六話】【七話】【十話】

無意識に行為に出る 【二話】【三話】【四話】【八話】【九話】

このように配列上大きな偏りがあるとは考えられない。副構成が意識的に行動に出る場合、何らかの対価を求めていることがわかる。その場合「おだてる」意味合いが強くなっている。他方、無意識に行動に出ている場合は「褒める」意味合いが強くなっている。この部分について策伝は厳密に区別していないように考えられる。なぜならば、どちらの場合でも同じような質の「笑い」を持つためである。策伝の意識の中で「褒める」と「おだてる」は区別されていないかっただいよう。

②の副構成がどのような意識下での行為であったとしても求められるのは主構成の心情変化であることがわかる。主構成の心情は「身の程をわきまえない振る舞いをする」などのような心情変化をした結果として、非現実的な行動

に出ることとなる。商人が無償で物を与えることは通常ではありえない行為であり、一般の人間が歴史上の人物や神仏と縁を持つこともそうあることではない。この一般の人間に非現実性を持たせることによって読者は違和感を得ることとなり、この違和感が「笑い」を生み出すと考えられる。

四話のように「笑い」の要素が弱い話も「ふはとのる」には分類されている。「ふはとのる」の「笑い」は分類において最優先事項でないことは既に見た通りである。その「笑い」も明確にならず、心情変化も明らかではない九話の扱いは分類から外れる話とするか、省略されているであろう部分を策伝の分類意図である「笑い」の質と話の構成に従って当てはまるように理解すべきか。本稿では、策伝の意図的省略が認められる話が他にもあることから省略されているものとして九話を考えたい。だが、九話の「笑い」の内容については嫁自慢、母自慢とも限定できなかったことは断っておく。

都合全ての話が策伝の「ふはとのる」の分類意識のうちに収まることとなったが、九話については一応の見解としておき、全ての項目の分類意識を見た上で再考する必要がある。

#### 4 結論にかえて

本稿では「ふはとのる」について安楽庵策伝の編集意識と創作意識に焦点を当て、全十話を分析した。「ふはとのる」という項目名については主構成が副構成に影響され、心理的な変化を起こすことに主眼を置いてつけられたと考えられる。その際の主構成の心理は「気をよくする」変化が多く、その結果日常的な登場人物である主構成が、非日常的な行動に出る。この「非日常」の部分に「笑い」が認められる場合が多い。「笑い」の認識以外の物による項目名の設定は、「笑い」が「ふはとのる」においては編集の第一条件ではないことがわかる。



また、「ふはとのる」と一つの項目を独立させているためか、話の構成も多くの話が似たような構成になっている。

- ① 主構成の登場
- ② 副構成の登場
- ③ 副構成の行動
- ④ 主構成の行動
- ⑤ 発生した「笑い」

この五要素が順に登場する場合が多い。これが全項目における話の共通構成であるのか、「ふはとのる」にのみ当てはまるものであるかは今後の考察を必要とするところである。

本稿において策伝の創作意識について全体を明確にすることはできなかった。だが、策伝が意識的変化を行っていることは認められた。

七話においては話の抽象化が確認された。献呈する上で問題があったのか、その理由は判然としないが話の始まりが唐突であり、省略されていると思われる部分もある。また、九話では具体的に描写してもかまわない、どちらかといえは具体的に記すことで意義が増すにも関わらず抽象的な描写に留めている。この二つの話については、策伝の人物描写に対する作為が見られると考える。

策伝が全項目において同じような変化をしているかいないかによって「ふはとのる」に固有の変化か否かが明らかになろう。この変化にも見られるように策伝の人間関係はモチーフとした人物をどれだけ正確に把握しているのか、の問題がある。全て聞いた話とすれば、直接の面識はなく策伝自身の想像のみのはずである。策伝の人間関係の求め

方については、半ば一方的に人間関係を求めていたようである。この交友に関しては中村幸彦氏の『策伝和尚送答控』についての論に明らかである<sup>10)</sup>。『醒睡笑』においても交友の有無に関わらず多くの特定人物が登場している。やはり抽象的にも具体的にも描写するには何らかの理由があるろう。「ふはとのる」では七話の描写理由は推測することができたが、九話については厳密な理由を見出すことができなかった。全十話が策伝の編集意識の中に収まっているものの、九話に関しては他の話と異なる点が多いことを意識する必要がある。

一項目だけの考察にとどまったが、「ふはとのる」においては「笑い」よりも項目名が編集の上位条件であったといえる。今後他の四十一項目についても同様の考察が必要であり、策伝の『醒睡笑』全体における編集意識と創作意識を探る必要がある。

註(1) 関山和夫氏「文人としての策伝」(『安楽庵策伝』所収 青蛙房 一九六一年)

「二書は共に小本であり、内容に於いても後世への影響に於いても、あらゆる面で『醒睡笑』が最も大きい」としている。確かに『戲言養気集』は七十二則、「きのふはけふの物語」は百五十五の話が分類されず収められている。

(2) 鈴木棠三氏『醒睡笑』の各巻各章(『醒睡笑』所収 岩波書店 一九八六年)

策伝にとつては、これらの章は「分類」として設けられたものではなく、資料(咄)をどのように按配・配列し、分量的な均整化をも図るといった点に、心を砕いた結果にすぎないのである。

宮尾與男氏『醒睡笑』と安楽庵策伝(『元禄舌耕文芸の研究』所収 笠間書院 一九九二年)

おそらく、この献呈本製作時に、笑話分類の編集が、はじめて読み手を考えて、策伝自らの分類案によってなされたと思われる。策伝も、献呈本の製作をするまでは、読み手などを考えない話し手として、また、自分の手控えとしての笑話を書き留めていた一収集者にすぎなかった。それが献呈本の製作によって、ここに話し手が読み手を意識した新たな話の世界をつくり、文学作品としての話、すなわち笑話文学の形成を結果的には促すことになった。

宮尾與男氏（同論文）

元和九年（一六二三）に『醒睡笑』八巻が、すでに成っていたことを序文によって知ることができる。この場合の八巻とは、体裁上の巻数で、八冊にわたる分量を占める笑話の書き留め集の意ぐらいに考えるべきで、正確に八巻分を有するものという解釈はとらなくてもよいとおもう

(3) 『醒睡笑』序（『断本大系 第二巻』東京堂出版 一九七六年）

ころはいつ、元和九癸亥の稔、天下泰平人民豊楽の折から、策伝某小僧の時より、耳にふれておもしろくおかしかりつる事を、反故の端にとめ置たり。是年七十にて、誓願寺乾のすみに隠居し、安楽庵といふ。柴の扉の明暮、心をやすむるひま、こしかたしるせし筆の跡をみれば、をのつから睡をさましてわらふ。さるまゝにや、是を醒睡笑と名付、かたはらいたき草紙を八巻となして残すのみ。

(4) 岡雅彦氏「醒睡笑」の分類からはみだす話（『北大近世文学研究会会報』十五号 一九六九年七月所収）

(5) 『百椿集』（『続群書類従』第三十三集・上所収）

(6) 『策伝和尚送答控』（『天理図書館善本叢書 第六十四巻 なぞ・狂歌・咄の本』所収 天理大学出版部 一九八四年）

(7) (2) 宮尾氏前掲論文

献呈本の製作によって、ここに話し手が読み手を意識した新たな話の世界をつくり、文学作品としての話し、すなわち笑話文学の形成を結果的には促すことになった。そして、そのときに、笑話のなかでも、理解のできない笑話または笑話としてうまくまとまっていらない笑話に、編者策伝は註記をほどこし、それを小文字という形を持って表現し、文章の末に添えた。

(8) 『角川古語大辞典』（角川書店 一九八二年）

(9) 『小学館日本国語大辞典・第二版』（小学館 二〇〇一年）

(10) 中村幸彦氏「安楽庵策伝とその周囲」（『国語国文』第十九巻一号収録 一九五〇年九月）

菊紅葉等を、前関白近衛信尋を初め二十一家へ、和歌をそえて送り、その返歌を求めたことがあった。妙法院の堯然親王や、竹門の良恕親王等の親王方もあれば、当代の歌よみ、中院通村や烏丸光広など勿論のがるべくもなかった。しかしこのおしつけ業にも、このおかしい老僧は、皆々に好意をもたれていたと見えて、殆んど全部からの返歌を、送答控に記し

『醒睡笑』巻之一「ふはとのる」に見られる安楽庵策伝の編集意識と創作意識

とどめている。

本文は『嘶本大系 第二卷』（東京大学図書館南葵文庫蔵本底本・東京堂出版）に拠っている。

（にしうら かずとし・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）